



松田潔医師

前日に名古屋市内で私用があり、被災状況をこの目で確かめようと立ち寄った。地域に点在するクリニックを意識して見て

医療最前線 災害に備える

県立中央病院から

〈291〉

低層階がつぶれた建物が至る所にあった。阪神大震災発生から5日後の1995年1月22日、山梨県立中央病院救命救急センター(当時)の責任者だった松田潔医師(現道志村診療所)は、神戸市内にいた。

回ると、とても診療できるような状況ではなかった。

山梨に戻り、翌23日には県庁で開かれた会議に出席。兵庫県から要請があった医療救護班派遣が話し合われ、県内医療機関からも医師と看護師が向かうこ

とになった。松田医師は後方支援として病院に残ることを決

め、震災直後から現地入りを希望していた後輩医師を第1陣に指名して1月26日に送り出した。派遣は県立中央病院と山梨医科大付属病院(当時)で入れ

療が大半。緊急手術も視野に必要機材を持ち込んでいたが使われることはなかった。

「震災発生からすでに10日ほど経過していて、(命の危険がある)急性期の患者対応はおおむね終わっていた(松田医師)。

急医療情報システム」(EMIS)と、被災地で負傷者を治療する「災害派遣医療チーム(DMAT)」が誕生。災害医療は大きく発展した。

2007年の新潟県中越沖地震、11年の東日本大震災では自ら被災地に向かい、医療支援に携わった松田医師は「山梨で災害が起きた場合、全国から多くの医療者が駆けつけてくれるだろう」。同時に警鐘も鳴らす。「災害時に病院機能は本来に維持できるのか。常に訓練と検証を重ねていかなければならぬ」

阪神大震災教訓に仕組み整備 被災地医療大きく発展

替わりながら3月20日まで続いた。

当時、松田医師は二つの問題点を感じた。一つは被災地の医療の状況が全く分からなかったことだ。山梨の救護班は神戸市内の小学校に設けられた救護所を拠点に近隣の避難所も回るなどしたが、風邪など軽症者の治療が大半。緊急手術も視野に必要機材を持ち込んでいたが使われることはなかった。

「震災発生からすでに10日ほど経過していて、(命の危険がある)急性期の患者対応はおおむね終わっていた(松田医師)。

全国で自然災害が相次ぐ中、県立中央病院からも被災地への派遣が積極的に行われている。新シリーズ「災害に備える」では、災害医療に関わった経験や山梨で必要とされる備えを医療従事者に聞く。